

「長い祈りと二レプトン」

(マルコによる福音書 12:38-44)

夫を失ったやもめは、生活の糧を得ることが困難なうえに様々な社会的な権利も奪われ、極めて弱い立場にありました。律法を通して神の思いを人々に伝え、それを率先して守るべき律法学者が、そのやもめを食物にしていたとは、本当に救いの無い話です。彼らは権威を見せびらかして歩き、上席、上座を好みました。しかしその一方で豊かな知識を悪用してやもめの財産を不当に手に入れていたのです。彼らは見せかけの長い祈りをするので、そのことをごまかしました。彼らのうちに神への思いがあったなら、彼らはやもめを大切にしたはずですが、なぜなら、神は繰り返しやもめへの特別な配慮、保護を聖書の中で呼びかけているからです。しかし、もはや彼らのうちに神は不在でした。神から離れた彼らにとって、律法はもはや都合の良い道具でしかなく、隣人の大切さも失われてしまいました。

賽銭箱に多くの金持ちがたくさん入れているのに対し、やもめは「二レプトン」を入れました。レプトンは新約聖書の中で最小の貨幣です。当時レプトン銅貨二枚で買えるのは小麦粉一つかみだったと言われていました。これは今日の旧約聖書に登場するやもめに残されたのと同じ量です。つまり、それはその日一日命をつなぐ最低量の糧でした。それを賽銭箱に投げ入れたやもめは、生活のすべて、生きるために必要なすべてを神に託したのです。それを見た主イエスは、彼女こそが「だれよりもたくさん入れた」と言われます。

見せかけの長い祈りではなく、生活全体を神にささげる、神にかける心を神は求めています。やもめの姿は、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」という最も重要な掟そのものです。その人は、今日の旧約聖書のやもめのように、食べ物に事欠かなくなるほどに恵みを受けます。律法学者のように神から離れ、隣人を軽んずることなく、神を愛し、「隣人を自分のように愛しなさい。」ということをおこなうことができますように。